

## 【CM字幕関連】

※事務局にて作成

- （シニア向けの）スマホの講習でワンセグ視聴を扱ったら好評。ワンセグでも字幕が付いていて、電車に乗っている時等は便利。シニアはテレビが大好きで、スマホはますます普及が進むだろうし、CM字幕はスマホでも見られていることも意識して頑張っていたきたい。
- 最近テレビの字幕を見るようになり、便利なものと実感。今では字幕のファンであり、CMに字幕がないと切りたくなる。CM字幕を進めるには様々な障害があるようだが、単なる「頑張ります」ではなく、工程表を策定してステップ・バイ・ステップで進めることが重要。諸外国の状況を見ると、各国ともCM字幕の義務づけには至っていないようだが、（字幕の付いたCMは）クオリティが高いものであるという認識を共有して検討を進めてほしい。
- CM字幕の推進については（内部の）営業委員会で検討しており、今週も月曜に会合を開催。CM字幕の検討状況について時間を割いて検討等を実施。1社提供枠についてはトライアルの次のステップの実現に向けて検討中であるが、ガイドラインをベースに搬入基準を整備したいと考えている。（音主査の発表にあった）ローカル局の設備更改の状況は現在調査中。次のステップに進めるためには業協・アド協との連携が重要であり、民放連としての考え方を丁寧にご説明してご理解を得たい。また、今後は放送不体裁の取扱いや費用負担のルール等の取引慣行を確立していくことが重要であり、引き続き検討を進めていきたい。
- 字幕は（ジムのような）騒しい環境でのテレビ視聴に有用であり、それぞれのWGの取組を推進していくことが大事。V i k i というサービスがあるが、それも各国語の字幕が付いていると認知されているからみんなが見るのであり、日本にも多言語サービスがあるという入口をきちんと周知することも必要。構成員から指摘のあったワンセグでも字幕が見られることは自分も含めて気が付いていなかった問題で、字幕のようなサービスは入口がわかりやすいことが大切だという好例だと思う。

- CM字幕に対する視聴者の要望が強いことは承知しており、今後はクライアントからの要望も増えてくると思うが、具体的にCM字幕を進めるとなると、放送事業者の設備更改が一気に進まない、CM字幕を制作できる会社も少ない、といった現状においては、広告会社として字幕の付いたCMの「ニーズ」と「シーズ」の間で（鶏と卵の議論にならないように）取組を充実させたい。
- CM字幕をクローズドキャプションで提供すると、地方の中小企業にとっては費用負担が大きくなる。CMをご覧になる人の利便性、CM字幕の目的に対する有効性で考えれば、現にオープンキャプション（テロップ）の字幕をつけたCMを制作している企業もあり、「CM字幕」にはオープンキャプションとクローズドキャプションの両方あるという認識ももってCM字幕の普及促進に取り組んでいきたい。
- 地デジ化以後、シニア層はBS放送をよく視聴している。BSでは、商品の宣伝等でオープンキャプションの番組が多く、シニアに好評であることも紹介しておきたい。

## 【多言語字幕関連】

- N I C Tの技術が政府の検討の場には上がることは光栄。N I C Tとしては翻訳の精度向上が使命であり、研究開発を加速したい。そのためには対訳コーパスの充実が特に重要だが、費用も時間もかかる。2カ国語の番組の原稿を持っている放送事業者や対訳のデータベースを持っている大学等の協力をお願いしたい。
- 今の日本は外国人労働者が増加する方向で政策の検討が進んでいる。彼らの日本語とのファーストコンタクトはその後のコミュニケーション能力の観点からも重要であり、テレビはまさにそのファーストコンタクトの筆頭。2020年の東京五輪の来日者に対する多言語字幕は「ゲスト」に対するサービスだが、外国人労働者の日本でのコミュニケーションのための多言語字幕は社会的に必要なものと捉えるべきであり、実現に向けてスピード感をもって取り組むことが必要。番組の内容の全部は分からなくても、少し分かるだけでも社会的に有益なものになるのではないか。
- 東京五輪も視野に入れて建設業界で外国人労働者の受入れを促進することが決まっており、また介護分野や技能実習生の増加についても検討されている。このような外国人労働者が最初の数ヶ月で日本語に慣れる仕組みを社会的に用意しておくことが必要で、多言語翻訳システムは有用なツールになるのではないか。こうした外国人労働者の派遣国は東南アジア諸国であり、中国語・韓国語以外のいろいろな言語への対応が必要になってくるのではないか。

- 多言語字幕WGでも、外国語として日本語を学ぶ人に向けた易しい日本語の字幕や平仮名だけの字幕について議論があった。いずれにしても翻訳の性能を上げることが肝要であり、ニュースや映画、ドラマといった2カ国語の原稿が充実している放送番組からコーパスを収集する仕組みの実現に向けた協力をお願いしたい。
- 日本は「ベストエフォート」に対する市民社会の理解が十分ではない。多言語翻訳のような新しいサービスは、一定の誤りが許容されるものから始めないと進歩しない。こうした点からも、多言語サービスの実証実験の場が早急に立ち上がることが望まれる。
- NHKが多言語字幕を行うとすれば、放送番組における「ベストエフォート」は許容されないものと認識。日本語の字幕でも正確性の確保に多大な労力を投入しているところであり、放送事業者として（正確な）多言語字幕に取り組むことは難しい。サードパーティが（NHKの番組の）多言語サービスを提供する場合には、自動翻訳の精度が上がった時にどういう協力ができるか考えたい。
- 原語に対してどういう用語で翻訳するかも番組編集の一部と認識しており、番組の原稿を外部に提供するのには放送法（の編集の自由の観点）に照らしてハードルが高いと思うが、どういう形での協力が可能なのか検討したい。

- 字幕は（ジムのような）騒しい環境でのテレビ視聴に有用であり、それぞれのWGの取組を推進していくことが大事だが、特に多言語字幕は「大事業」であり、放送番組の正確性も重要だが、「新たな負担は困る」という雰囲気では前に進めない。放送番組の内容は100%提供側の問題（責任）だが、字幕については番組を受け取る側の問題と捉えることもできるのではないか。
- 字幕を受け取るベネフィットに対して受け取る側がどれだけ貢献できるか。サービスの向上のためには利用者からのフィードバックが重要で、字幕を受け取る側が多言語サービスの質の向上に参画できる仕組みを作ることが大事ではないか。こうした大事業ではあらゆるステークホルダーが協力しなければならないが、誰が当事者意識を持つか。字幕を受け取る側も当事者となっていていいのではないか。
- 「V i k i」というサービスは、放送番組の権利処理をした上でボランティアが字幕を付けるものだが、ある意味で「ソーシャル」なプロセスを経て完璧なものに仕上げている好例。放送事業者はソース（放送番組）に対する責任は負うが、翻訳や字幕の付与は受信者の側で行うということもあり得るのではないか。
- V i k iは今では売れているサービスだが、それも各国語の字幕が付いていると認知されているからみんなが見るのであり、日本にも多言語サービスがあるという入口をきちんと周知することも必要。構成員から指摘のあったワンセグでも字幕が見られることは自分も含めて気が付いていなかった問題で、字幕のようなサービスは入口がわかりやすいことが大切だという好例だと思う。